謠曲集

上

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月十三日發行

有朋堂文庫
謠曲集上卷
（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷兼發行者　三浦捷一

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

緒言

謠曲は猿樂の能に伴ふ章曲にして、室町幕府の世、能の發達と相俟つて形成せられたる一大文學也。而して、其能が古來幾多の舞樂の集大成せられたるものなるが如く、文亦各種の文學の綜合と見るべきものにして、上古、中古の古典に見ゆる傳說、歌物語等より、近古時代の戰記物に至るまで、凡そ有名なる文章と話篇とは、殆ど擧げて謠曲の材料に供せられたりと稱するも、敢て過言に非ず。而して、その行文の多くは歌語を根底とし、更に釋氏の說法を以て潤色せり。蓋し文學卽歌、思想卽佛に過ぎざりし時代精神の反映と稱すべし。

謠曲の結構は泰西の所謂戲曲（ドラマ）に髣髴たるものありと雖も、而も尙頗る幼稚にして、全然叙事詩の痕跡を殘せる物尠からず。その神事能といひ、幽靈能といひ、又は狂女物といふが如き、殆ど同巧異曲にして、甚だ變化に乏し。然りと雖も、能く古來の文學を綜合集成して　國民の文學上の聯想に愬へ、或は淸婉羽衣の如き、艶麗松

風の如き、幽玄大原御幸の如き、壯烈安宅の如き、幾多の名曲を成せる技量は、亦大いに見るべきものあり、殊にその影響を江戸文學に及ぼしたる効果に至りては、特に其偉大なるを認めずんばあらず。

本書の校訂上に採りたる方針大略次の如し。

一、觀世流改訂謠本を底本とし、その内外二百番を上下二册に分ちて刊行す。

一、讀物として文章に重きを置くに努めたれど、次第、一聲、道行、歌、語等の文句の上の名目をも記し、サシ、クリ、ロンギ、クセ、ワカ、キリ等謠ひ方の上の名目をも掲げ、舞の箇所をも示せり。蓋し謠曲は詞と謠とを二大要素とすれば也。

大正三年六月

校訂者　野村八良

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

謠曲集上 目錄

內一

高砂……一
田村……七
江口……一四
班女……二〇
鵜飼……二七

內二

難波……三四
兼平……四一
千手……四八
卒都婆小町……五五

內三

紅葉狩……六二
老松……六七
賴政……七二
井筒……七九
三井寺……八五
天鼓……九三

內四

白樂天……一〇一
實盛……一〇七
楊貴妃……一一五
玉葛……一二一
融……一二七

內五

養老……一三五
清經……一四一
采女……一四九
通小町……一五六
小袖曾我……一六一

內六

竹生島……一六九
朝長……一七四
姨捨……一八二
柏崎……一八八
阿漕……一九六

內七

志賀……二〇三
鵜……二〇九
大原御幸……二一五
梅枝……二二四
誓願寺……二三〇

內八

蟻通……二三七
忠度……二四三
熊野……二五〇
遊行柳……二五八
藤戶……二六四

內九

玉井……二七一

景清……二七七
杜若……二八六
二人靜……二九二
安達原……二九八

內十

賀茂……三〇五
俊寛……三一一
松風……三一七
西行櫻……三二五
浮舟……三三一

內十一

吳服……三三七
八島……三四三

鸚鵡小町……三五二
葛城……三五八
當麻……三六四

內十二

海士……三七一
鞍馬天狗……三七九
定家……三八六
咸陽宮……三九三
東岸居士……三九九

內十三

龍田……四〇三
夜討曾我……四〇九
夕顏……五一七

隅田川……四三二
雲林院……四三一

內 十四

春日龍神……四三七
船　橋……四四三
源氏供養……四四九
花　筐……四四五
富士太鼓……四六三

內 十五

皇　帝……四六九
通　盛……四七四
檜　垣……四八〇
櫻　川……四八六

山　姥……四九五

內 十六

氷　室……五〇三
善　界……五一〇
芭　蕉……五一五
百　萬……五二一
船辨慶……五二七

內 十七

右　近……五三五
女郎花……五四一
關寺小町……五四八
自然居士……五五五
大　會……五六四

內十八

三輪……五六九
安宅……五七四
東北……五八五
蟬丸……五九〇
猩々……五九八

內十九

白髭……六〇一
盛久……六〇七
佛原……六一五
善知鳥……六二〇
小鹽……六二七

內二十

邯鄲……六三三
殺生石……六三九
野宮……六四五
錦木……六五二
唐船……六六〇

內二十一

弓八幡……六六七
鉢木……六七三
羽衣……六八五
道成寺……六九一
龍虎……六九六

內二十二

芦刈……七〇三

敦盛……七一二
木賊……七一九
葵上……七二七
輪藏……七三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

謡曲集

内一

高砂

概模

古今集の序に、「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ、とあるに據りて、この名木の精を出して由來を語らしむるめでたき祝言能なり。（脇能）

前シテ　松の精（尉）　後シテ　住吉明神
シテツレ　松の精（嫗）　ワキ　神主

ワキ三人次第謡「今を始の旅衣、今を始の旅衣、日も行く末ぞ久しき。ワキ詞「そも〳〵是は九州肥後國、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候程に、此度思立ち都に上り候。又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。三人道行謡「旅衣

末はるゞの都路を、末はるゞの都路を、今日思ひ立つ浦の波、舟路のどけき春風の、幾日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるゞと、さしも思ひし播磨潟、高砂の浦に著きにけり。高砂の浦に著きにけり。

シテ、ツレ二人一聲謡「高砂の、松の春風吹き暮れて、尾上の鐘もひゞくなり。ツレ謡「波は霞の磯がくれ、二人謡「音こそしほの滿干なれ。シテ、サシ謡「誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、二人謡「過ぎ來し世々はしら雪の、積りゝて老の鶴の、塒に殘る有明の、春の霜夜の起居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅蓆の、思を述ぶるばかりなり。下歌おとづれは松にこと問ふ浦風の、葉落衣の袖そへて、木陰の塵を掻かうよ。木陰の塵を掻かうよ。上歌所は高砂の、所は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや、木の下陰の落葉かくなるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久き名所かなそれも久き名所かな。

ワキ詞「里人を相待つ處に、老人夫婦來れり　いかに是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「こ

尾上―尾上寺

誰をかも―末句友ならなくに（古今集）

生の松―筑前の生の松原

古今集―醍醐の御宇紀貫之等勅を奉じて撰ぶ

なたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ。シテ詞「唯今木蔭を清め候こそ高砂の松にて候へ。ワキ詞「高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに、なにとて相生の松とは申し候ぞ。シテ詞「仰のごとく古今の序に、高砂住の江の松も、相生のやうに覺えとありさりながら、この尉は津の國住吉の者、これなる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ。ワキ謠「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔てゝ住むと、云ふはいかなる事やらん。ツレ謠「うたての仰せ候や、山川萬里を隔つれども、互に通ふ心遣の、妹背の道は遠からず。シテ詞「まづ案じても御覽ぜよ。シテ、ツレ二人謠「高砂住の江の、松は非情のものだにも相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦となるものを。ワキ謠「謂れを聞けば面白や。さて〳〵さきに聞えつる。相生の松の物語を、所に言ひ置く謂れはなきか。シテ詞「昔の人の申しゝは、是はめでたき世のためしなり。ツレ謠「高砂といふは上代の、

萬葉集の古の義、　シテ詞「住吉と申すは、今此御代に住み給ふ延喜の御事、ツレ謡「松とは盡ぬ言の葉の、シテ詞「榮えは古今相同じと、シテ、ツレ二人謡「御代をあがむる喩なり。ワキ謡「よくよく聞けばありがたや。今こそ不審春の日の、シテ謡「光和らぐ西の海の、ワキ謡「かしこは住の江、シテ謡「こゝは高砂、ワキ謡「松も色そひ、シテ謡「春も、ワキ謡「長閑に、上歌　四海波靜にて、國も治る時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや。逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても言もおろかや斯る世に、住める民とて豐なる、君の惠ぞありがたき。君の惠ぞありがたき。

時つ風云々―主充論衡に「太平之世五日一風十日一雨風不鳴條雨不破塊」

ワキ詞「猶々高砂の松のめでたき謂れ、委く御物語り候へ。クリ地謡「それ草木心なしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春の德を具て、南枝花始て開く。シテサシ謡「然れども此松は、其氣色長へにして、花葉時を分ず、地謡「四つの時至ても、一千年の色雪の内に深く、又は松花の色十返りとも云へり。シテ謡「かゝるたよりを松が枝の、地謡「言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて、シテ謡「生きとし生けるもの毎に、地謡「敷島の陰によるとかや。

長能―藤原氏一條天皇の頃の歌人今「ちやうのう」と謠へり
十八公―松の字吳丁固の故事
始皇云々―秦始皇帝泰山に封禪して雨を松下に避け其樹を封じて五太夫とす
松の葉の散りうせずして云々―古今集序の詞

クセ 然るに長能が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌に漏るゝ事なし。草木土砂風聲水音迄、萬物の籠る心あり。春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の姿ならずや。中にも此松は、萬木に優て、十八公の粧ひ、千秋の綠を爲して、古今の色を見ず、始皇の御爵に、あづかる程の木なりとて、異國にも本朝にも、萬民之を賞翫す。シテ謠「高砂の尾上の鐘の音すなり。地謠「曉かけて、霜はおけども松が枝の、葉色は同じ深綠、立ち寄る蔭の朝夕に、かけども落葉の盡きせぬは、眞なり松の葉の、散り失せずして色は猶、正木の蔓長き世の、譬なりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめでたき。ロンギげに名を得たる松が枝の、げに名を得たる松が枝の、老木の昔現して、其名を名乘給へや。シテ、ツレ二人謠「今は何をか包べき。是は高砂住の江の、相生の松の精、夫婦と現じ來りたり。地謠「ふしぎやさては名所の、松の奇特を現して、シテ、ツレ二人謠「草木心なけれども、地謠「畏き代とて、シテ、ツレ二人謠「土も木も、地謠「吾大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さんと、夕波の汀

なる、海人の小舟に打ち乘りて　追風にまかせつゝ、沖の方に出にけりや、沖の方に出にけり。ワキ上歌謡「高砂や、此浦舟に帆をあげて、此浦舟に帆をあげて、月もろともに出で汐の、波の淡路の島陰や、遠く鳴尾の沖過て、はや住の江に著きにけり。早や住の江に著きにけり。後シテ謡「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾世經ぬらん。睦ましと君は知らずや瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すゞしめ給へ御奴たち。地謡「西の海、あはきが原の波間より、シテ謡「現れ出でし神松の、春なれや。殘の雪の淺香潟、地謡「玉藻刈るなる岸陰の、シテ謡「松根に倚つて腰を摩れば、地謡「千年の緑手に滿てり。シテ謡「梅花を折つて頭に挿せば、地謡「二月の雪衣に落つ。

（神舞）ロンギ地謡「ありがたの影向や、ありがたの影向や。月住吉の神遊、御影ををがむあらたさよ。シテ謡「げにさまゞの舞姫の、聲も澄むなり住の江の、松影も映るなる。青海波とは是やらん。地謡「神と君との道すぐに、都の春にゆくべくは、シテ謡「それぞ還城樂の舞。地謡「さて萬歲の、シテ謡「小忌衣、地謡「さす腕には惡魔を拂ひ、をさむる手には壽福を

われ見ても—伊勢物語の歌
睦ましと—末句「久しき世よりいはひそめてき」伊勢物語の歌住吉明神、前の歌に對へたりといふ
西の海—「西の海や檍が原の波間よりあらはれ出し住吉の神」續古今集の歌
あはきが原—今「あをきが原」と謡ふ
青海波、還城樂、千秋樂、萬歲—共に樂名

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com